

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：32688

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350948

研究課題名(和文) 原発事故影響下の子どもの発達と幸福感を育む室内遊びの開発と地域支援の実証的研究

研究課題名(英文) An Empirical Research on Indoor Play and Community Support for the Development and Well-being of the children under the Influence of the Fukushima Nuclear Power Plant Accident

研究代表者

小林 芳文 (Kobayashi, Yoshifumi)

和光大学・現代人間学部・名誉教授

研究者番号：70106152

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、原発事故影響下にある子どもの発達と幸福感の支えるための室内遊びと地域支援に関する実証的研究である。継続的展開に向けて、支援者養成や地域施設を活かしたプログラムの開発を試みた。本研究の結果、子どもたちに遊具や場所を提供するだけでなく、大人が共に遊びの場を創る体験を深めることが重要であることが明らかになり、この点において、ムーブメント教育・療法の有効性が確認された。さらに、新たなツールとしてオリジナル絵本が開発され、モデルプログラムが提示された。

研究成果の概要(英文)： This study is an empirical research on indoor play and community support for the development and well-being of children under the influence of the Fukushima nuclear power plant accident.

For the further deployment of the play programs training for support staff the utilization of and community facilities have been focused. The results of this study, on top of providing playground equipment or space, clearly points to the importance of that adults who play proactively together. In this regard, the effectiveness of the Movement Education has been proved. Furthermore, the original picture book has been developed as a new tool, and the model program with it is presented.

研究分野：子ども学(子ども環境学)

キーワード：運動遊び ムーブメント教育・療法 室内遊び 原発事故影響下 親子遊び

1. 研究開始当初の背景

東日本大震災とその後起きた福島第一原子力発電所の事故による影響は継続している。日本学術会議(2011)は、震災後の施策が必ずしも子どものことを第一に考えての施策ではなかったことを指摘し、日本の将来を担う子どもの心身の健康を増進し健やかな育成を目指すための提言を発表した。低線量放射線環境下の地域では、放射線被爆の不安から子どもたちの外遊び活動が制限された。外遊びの機会を奪われた子どもたちを一時的に移動させ、キャンプ等自然活動を実施する「保養プロジェクト」も全国で展開されたが、日常的な遊び活動の量と質の変化が子どもの健全な発達に及ぼす影響は深刻で、発育遅滞や基礎体力の低下への対策や情緒面における支援の必要性が叫ばれた。徐々に、行政や民間団体によって、室内遊び環境の整備が行われ、福島県内には大小様々な室内遊戯施設が設備されている。そのような施設や体育館等において、子どもたちが楽しく身体を動かすための遊び活動の提供や「心のケア」をめざした取り組みなども行われていたが、支援団体等が訪問して単発で開催する企画が大半で、今後は、現地での継続的取り組みを視野に入れた支援活動が望まれていた。

また、福島県内では、乳幼児を対象とした子育て支援の現場においても、不安を抱えながらも避難できない(しない)親子、家族と離れて暮らしている親子、避難先から戻ってきた親子、放射線量がさらに高い区域から避難してきた親子等、様々な条件の親子が入り混じって微妙な人間関係を形成しており、子どもの発達支援だけでなく地域の大人たち自身が心身を解放させ自己を表現する楽しさや人と繋がる喜びを感じながら互いを支え合うための新たな関係づくりをサポートする取り組みとして、室内での親子遊び活動の充実に期待が寄せられた。大人向けの子育ての勉強会や放射線に関するセミナー等も開催されているが、遊び活動の発展には、親や地域活動の担い手となる現地の支援者が楽しみながら参加し、子どものよき遊び相手として自ら遊びを体験する中で「遊びの場をつくる力」を養っていく活動が必要である。

一方、本研究の代表者らが取り組んできた「ムーブメント教育・療法」は、米国の Marianne Frostig らの理論を基にしており、情緒や社会性、認知の諸機能の発達を「身体運動」に結びつけて捉え、子どもの自発性と達成感を引き出すことをねらいとしている。日本では、30年程前から障がい児支援を中心に保育や医療の現場で独自の発展を遂げてきた。近年、特別支援教育の導入で、個別のニーズに対応する有効な支援法が模索されており、また、遊びの消失や子どもの体力低下が問題とされ、子育て支援における環境設定のあり方や子どもの発達を支える地域活動のあり方に関する具体的な方法が求められ

ている中、動きたくなる環境を提供しながら、訓練ではなく子どもの主体性を重視する活動理念や集団の中で個を活かすための発達段階に応じた遊びの支援を原点とする考え方や充実したアセスメントツールの活用法に関心が高まっている。さらに、子どもの支援において家族参加を前提とする考え方が根底にあり、家族が楽しく参加できる方法論が充実している。楽しく受容的な遊びの場の体験を通して、家庭での遊びのメニューが豊富になり家族で楽しむ機会が増えたり、親自身にポジティブな変容が生まれたりして、親の QOL(生活の質)の向上や子育て充足感の増加につながっているという報告がなされ、そのような親の変化が子どもの発達にも影響を与えると考えられてきた。また、教師や保育士等を対象にした研修プログラムも充実しており、参加者の意識調査等からムーブメント活動を通して支援者の幸福感が高まることも示唆されている。さらに、代表者らは、大学と地域の連携において、子どもの育ちと子どもを取り巻く家族や地域を支援するための具体的な遊び活動を模索するプロジェクトを立ち上げ、施設・遊具・自然環境・人材・組織・ネットワーク等地域の様々な「環境(資源・財産)」の潜在力を高め、豊かな「遊びの場」を共創する実践研究を行っていた。

2. 研究の目的

以上のような背景から、本研究においては、原発事故影響下にある地域(主に福島県)を対象に、子どもの発達と幸福感を育むための効果的な室内遊びのプログラムを開発・実践することを目的とした。さらに、遊び環境が継続的に発展するための土台づくりとして、親や現地の支援者を対象としたリーダー養成や既存の「環境」を活かした試みを実施した。これらの実践の中で関係者との意見交換や検討を繰り返し、より効果的なプログラムを創出し、地域の人々による「遊びの場づくり」の支援を最終目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、3年計画で実施された。初年度の2013(平成25)年度には、原発事故の影響下にある子どもの現状と遊び「環境」に関する基礎調査を行い(研究1)、地域の施設を活かした室内遊びプログラムを提供し、参加者の意識調査を行いながら現地への適用を探った(研究2)。さらに、初年度後半には、現地の支援者養成を目指した研修プログラムを実施した(研究3)。2年目の2014(平成26)年度には、1年目の成果を中間報告としてまとめ、課題を整理し(研究4)、また、(研究3)研修プログラムの参加者による室内遊びの実施を支援した(研究5)。最終年度となる2015(平成27)年度には、その成

果をまとめ、学会発表、シンポジウム開催の形で報告を行った(研究6)。

本研究においては、以下の方法で得た情報を収集しそれらを統合して取り扱った。

参与観察の集約：発表者自身が活動にかかわりながらフィールドノーツを作成し、活動の記録、また前後の親との対話における記録をまとめた。さらに、活動の前後に行われるミーティングにおいては、他のリーダーやスタッフによる情報共有、意見交換の内容も記録として活用した。

映像資料の分析：参加者の許可を得て、撮影したビデオ、写真のデータを対象とした。

アンケート・聞き取り調査：保護者や支援者を対象に自由記述式のアンケートや聞き取り調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 初年度 2013 (平成 25) 年度の成果

初年度(2013年度)は、当初の計画にそって、福島県内において原発事故の影響下にある子どもの現状と遊び「環境」に関する基礎調査を行い(研究1)、地域の施設を活かした室内遊びプログラムを提供し、参加者の意識調査を行いながら現地への適用を探り(研究2)、現地の支援者養成を目指した研修プログラムの実施(研究3)を継続して遂行した。(研究1)(研究2)(研究3)においては、当初の計画通り、平成25年度後半より、月1回のペースで室内遊びのプログラムと研修プログラムを実施しながら現地調査を重ねた。さらに、前倒し請求により、以下の追加研究を実施した。

<追加研究>(研究1)(研究2)を通して、同じく東日本大震災の被災地であるが原発事故の影響下にはない地域との比較の必要性を見出し、比較対象として宮城県石巻市における調査実践を追加した。福島県郡山市と宮城県石巻市で同じ親子遊びのプログラムを実施し、実践の様子や参加者の意識調査などをもとに比較検討した。石巻市では、津波被害によって多くの施設が破壊され、当時就学前の幼児が安全に遊べる環境がまだ十分ではなく物理的な遊び場が不足していたが、プログラムを実施した子育てサークルの母親たちは、自らが担い手となって新たに地域コミュニティを復興していこうという意欲が高く、ムーブメント活動においては、共に集い遊ぶことの意義を再確認している様子がうかがえた。一方、郡山市の活動では、子どもの運動不足については心配する様子が見られるが、原発事故の影響や復興に向けて積極的に議論するような姿は見られなかった。また、プログラムの前後で母親の気持ちや表情に変化が見られた。

<追加研究(研究4)>平成26年度(2年目)の計画であった1年目の成果報告と課題の整理(研究4)を前倒しで実施した。まず、本研究の概要を分かりやすく伝えるパ

ンフレットを作成し、関係各所に配布し理解を深めながら実践調査を継続した。また、学会にて口頭発表を行った。

さらに、2014(平成26)年3月2日には、郡山女子大学にて、中間報告のイベントとして公開シンポジウムを主催し、関係者との意見交換を行い、課題を整理した。

(2) 2年目 2014 (平成 26) 年度の成果

初年度の実践研究を通して、特に、ムーブメント法独自に開発された遊具を活用することで、支援者(リーダー)が人や施設等の条件の変化に柔軟に対応でき、また、参加者同士のかかわりが自然と増し、コミュニケーションの機会を創り出すことで、共に遊ぶ体験がコミュニティの形成につながるという手応えを得た。その上で、2年目の取り組みにおいては、プログラム実施のリーダーとして現地のスタッフが担う場面を増やしながらか(研究5)、地域や家庭における活動の継続をさらなる目標に掲げて取り組んだ。

ムーブメント遊具という具体的なツールがあることによって、提供する集団遊びが活性化するように、経験の少ない支援者や母親たちが無理なく楽しく繰り返し地域や家庭で子どもと遊び活動を実践したくなるような具体的な支援ツールが必要であると考え、実践、調査を繰り返しながら検討し開発に取り組んだ。その結果、計画当初には提示されていなかった「ムーブメント絵本」の開発に着手することになった。このことは、実践研究ならではの進展であり、本研究の独自性と捉えられる。

(3) 最終年度 2015 (平成 27) 年度の成果

最終年度となる平成27年度は、参与観察、VTRによる記録分析、インタビュー調査をもとに、関係する学会、研究会等での報告を行いながら(研究6)実践活動を継続した。

特に、独自に考案した「ムーブメント絵本」を活かした親子遊びのプログラムを実践し、活動内容や参加者の意識調査を行った。絵本の世界を共有することで、子どもも大人もその世界観を共有しながらより活動的になっている様子が確認され、親も子も「からだ・あたま・こころ」の全身で、「今ここで」共に体験した楽しい活動が基盤にすることで、親自身の体験だけによらず、親の幸福感も高めながら、親子の関係をより深くつなぐ効果が期待された。また、絵本の親しみやすさや手軽さに、ムーブメントプログラムの中で示された遊び活動の応用性が加わることによって、無理なく親の意識を変え、家庭における遊びのバリエーションを増やす可能性を見いだした。

さらに、成果発表の催しとして、公開シンポジウム「あそびのちからはいのちのちから～福島の子どもの笑顔に寄せて～」を開催した(平成27年12月、和光大学)。オリジナル絵本を活用したプログラムについて

は実演を含めた発表を行い、実際の絵本に活動案の解説を含めた冊子として、シンポジウム参加者や関係各所に配布する形で報告とした。

加えて、本研究における対象は主に未就学児の親子であったが、関係者からの要望を受け、一部、小学生の親子を対象とした取り組みにも発展し、これらの実践研究で得た新たな課題やニーズについても報告した。実践を通して、多くの子どもたちが動くことそのものによる爽快感や満足感を得て、活動への意欲を示していることが解った。一方で、親は、自身の体力や運動不足について否定的な気づきを得ながらも、子どもとふれあって共に遊ぶことへの喜びを表していた。また、子どもの親に対する気づきからは、親たちや教師が活発に動いた姿がうかがえた。震災以降、特に子どもの体力向上や運動習慣の改善が継続的な課題としてあげられていたが、子どもは、他者との交流の中で他者の行動を観察し、模倣しながら行動の仕方を学ぶことが多いため、行動変容を起こす場面においては、親や学校の教師等の身近な大人の行動が社会的要因として果たす役割は大きく、このような点に着目した活動が求められるだろう。さらに、対象となったのは、震災直後またはその一年後に小学校入学を迎えた境遇の子どもたちとその親であることを考えると、親の気づきに、子どもが生き生きしている姿に触れながら共に遊ぶことで「安心した」、「癒やされた」との言葉が残っていたことも重く受け止め、活動の必要性をあらためて確認した。

(4) まとめ

本研究を通して、子どもたちに遊具や場所を与え、「遊ばせる」環境を提供するだけでなく、共に遊ぶ大人が環境になることが重要であり、その環境づくりに、ムーブメント教育の方法論は有効であるとの手応えを得た。特に、ムーブメント遊具を活かしたプログラムが、人や施設等の条件に柔軟に対応しながら、子どもの発達段階に合わせた課題を提示できること、さらに、無理なく参加者同士のかわりを促し、自然なコミュニケーションの機会を創り出すことを可能としていた。また、絵本や季節をもとにしたテーマやストーリーを設定することで、共に遊びの場を創る体験が深まり、コミュニティの形成につながると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

小林芳文・大橋さつき：大学と地域の連携を活かした遊びの場づくり - ムーブメント教育・療法の活用, 和光大学総合文化研究所年報 東西南北 (2015), 204 - 216 .

〔学会発表〕(計6件)

大橋さつき：室内遊びにおけるムーブメント遊具の効果：福島への支援者を対象に，保育学会，(20160507)，東京学芸大学．

大橋さつき：小学校における親子遊び活動の可能性 - ムーブメント教育による東北支援の取り組みから - ，児童学会，(20160305)，鎌倉女子大学．

大橋さつき：福島の子を対とした「創造的身体表現遊び」の実践,第67回舞踊学会(20151206)，福島大学．

大橋さつき・恵濃志保：絵本を活用した親子ムーブメント - 発達障がい児支援と被災地支援における実践から - ，子ども学会，(20151010)，甲南女子大学．

大橋さつき：ムーブメントプログラムにおけるオリジナル絵本の開発と活用 - 福島の子を対とした実践から - ，日本児童学会，(20150322)，鎌倉女子大学．

恵濃志保・大橋さつき：福島の子を対としたムーブメント法による室内遊びプログラムの実践，日本児童学会，(20131222)，富山大学．

〔その他〕

(1)(中間報告イベント)

公開シンポジウム：「ふくしま」で、いま、「ムーブメント」にできること，(20140302)，郡山女子大学．

大橋さつき：報告「東北版あそびのちからはいのちのちから」プロジェクトについて，

小林芳文：講義 子どもを育む遊び環境の意義 - ムーブメント教育・療法の実証的研究から - ．

恵濃志保・柏木美穂：報告&実技郡山市の子を対とした室内遊びの実践 - ムーブメント遊具の活用を中心に - ．

飯村敦子：実技 発達の「流れ」と「広がり」に寄り添うムーブメントプログラムづくり．

一柳(上野)智子・橋本静枝・花里裕美子：意見交換会 話題提供

(2)(成果報告イベント)

公開シンポジウム「あそびのちからはいのちのちから - 福島の子もたちの笑顔に寄せて - 」，(20151213)，和光大学．

恵濃志保：公開親子ムーブメント教室：ムーブメント絵本『まねっこパレード』であそぼう！(来場の子を対に福島で実践したモデルプログラムの再実施)．

小林芳文・大橋さつき：研究プロジェクト「東北版あそびのちからはいのちのちから」成果報告：笑顔が笑顔を呼ぶ好循環 - 福島におけるムーブメント教育の活用 - ．

菊池信太郎：講演：子どもは未来、真の
復興に向けて

(3) ホームページ

<http://www.wako.ac.jp/~satsuki/a1/index.html>

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

小林 芳文 (KOBAYASHI, Yoshifumi)

和光大学現代人間学部 名誉教授

研究者番号：70106152

(2) 研究分担者

大橋 さつき (OHASHI, Satsuki)

和光大学 現代人間学部 准教授

研究者番号：60313392